

## アブドゥルカーデイルのキリスト教徒認識

所(析堀) 木綿子\*

The Notion of Christianity According to 'Abd al-Qādir

TOKORO (TOCHIBARI) Yuko

This article aims to analyze the view of Christians held by al-Amīr 'Abd al-Qādir al-Jazā'irī, (1807-1883), the leader of the military combat against the French colonial army in 19th century Algeria (1832-1847). By contrast, he is mentioned as a precursor of inter-religious dialogue between Muslims and Christians, because of his rescue of Christian people in 1860 in Damascus. Therefore, by the terminology of inter-religious dialogue, the period in Amboise (1848-52) has been considered to give a clue to his understanding of Christians. However it is not clear how he really grasps the meaning of the coexistence of different religious people. The paper focuses on the letters by 'Abd al-Qādir to people in Amboise city, which continued to be sent even when he left France and stayed in Bursa and Damascus. His letters show his respect for Islamic Law, for fellow human beings, and toward Christianity, although some of his works do mention Christians as having good qualities while upholding the superiority of Islam over other religions including Christianity, the same as Islamic classical thinkers. Furthermore, his letters sent to the French enabled him to express his intention to avoid playing a political role for French-Middle Eastern politics.

### I. はじめに

一般に他の宗教を理解する試みは異なる人々の接触に伴い起こることが多い。その中には交易、学術交流もあるが、摩擦や戦争の状況も含まれる。本論では、19世紀のフランスのアルジェリア侵略に対する武装闘争を指導し、結果的にフランスに降伏した、アミール・アブドゥルカーデイル・ジャザーイリー (Amīr 'Abd al-Qādir al-Jazā'irī, 1807-1883) の事例から、西欧の中東支配を経験する中で、ムスリム思想家としての彼のキリスト教徒に対する認識がどのようなものであったかについて、彼の著作、フランス人との手紙を通じて明らかにすることを目的とする。

まずアブドゥルカーデイルの生涯について概要を述べる。1830年のアルジェ占領から徐々に支配を拡大していったフランス軍に対し、アブドゥルカーデイルは西部アルジェリアにおいてジハードを宣言、フランス軍に対して互角ともいえる戦いを挑み、軍事・行政機構を整備し、人々をイスラームの教義のもとに糾合させることを目指した<sup>1)</sup>。とくに1837年には当時のアルジェリアの領域とされた三分の二を統一するに至った。しかし全面占領政策を意図し、1839年から大量の軍勢力を投入したフランス軍によって、彼は1847年にフランス軍の武力の前に屈した。その後彼は一行とともにフランスでの拘留の憂き目に遭い、1852年、ナポレオン3世となるルイ＝ナポレオンの恩赦によって解放され、オスマン帝国領のブルサ、ダマスカスに居住し、思想探求と教育に専心した。

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程、日本学術振興会特別研究員 (DC2)

1) Muhammad b. 'Abd al-Qādir al-Jazā'irī, *Tuhfa al-Zā'ir fi Ta'rīkh al-Jazā'ir wa al-Amīr 'Abd al-Qādir*, Mamdūh Haqqī (ed.), Ṭab'a 2, Bayrūt: Dār al-Yaqza al-'Arabiya li al-Ta'lif wa al-Tarjama wa al-Nashr, 1964; Raphael Danziger, *Abd al-Qadir and the Algerians: Resistance to the French and Internal Consolidation*, New York: Holmes & Meier Publishers, 1977.

以上のように、彼の生涯は闘争指導者としての前半生と思想家としての後半生とに大きく二分される。これらの間にある、すなわち彼の行動・思想上の転機としてとらえられるのがフランスでの拘留である。このときの思想探求が1860年のダマスカスでのムスリムの暴動におけるキリスト教徒救済に通じるものとする見解は多くを占め、拘留中のフランス人との交流が、彼のその後のキリスト教徒に対する思想や行動の形成において大きな影響を与えたとする<sup>2)</sup>。

先行研究ではアザン [1925] の『アブドゥルカーディル——フランスの敵から友へ』の題に代表されるように、アブドゥルカーディルのキリスト教徒観は敵対から降伏を経て友愛に変化したとの観方が一般的である<sup>3)</sup>。その後の彼のフランス人との親密な交流は、確かに政府高官、大臣、将軍、聖職者、一般の市民、学者、医師等々、様々な相手に書き送った手紙からも明らかであるかのように思われる<sup>4)</sup>。他方アブドゥルカーディルのイスラームにおけるキリスト教徒観についても若干ながら言及がみられる。19世紀の歴史学者ブージュラ [1986] は、アブドゥルカーディルの1860年のダマスカスでのキリスト教徒救済を賞賛しながらも、彼がキリスト教徒を征服者に対して人頭税を支払わなければ成らない従属民 (zimmis, mouahidins) として、「シリアで起こった不幸の主な原因」であるキリスト教徒についてのムスリムの一般的見解と同じように述べていることを指摘している<sup>5)</sup>。ティッシエはアブドゥルカーディルが実際にキリスト教聖職者と交流があったにもかかわらず、彼のキリスト教徒観はイスラームの伝統的な見識であるとする<sup>6)</sup>。これらからは敗北後表面上友愛であるかのようにみえるキリスト教徒との関係について、イスラームの伝統的な観点と相容れないことがみてとれる。以上からブーイェルディン [2011] が、拘留中フランス側が政治的な意図をもって彼に接触していたことを明らかにしているように、彼のキリスト教徒観がフランスへの降伏の観点で捉えられていることが大きい<sup>7)</sup>。

他方このようなアブドゥルカーディルのキリスト教徒との交流の側面について、宗教間対話として捉える見方もある。20世紀後半から、アブドゥルカーディルについて宗教間対話者の先駆として再評価する流れがみられるようになった<sup>8)</sup>。これに先んずる19世紀当時でも、イスラームとキリスト教徒の間での宗教間の対話を標榜する動きはあった。チュニスを中心に布教活動を行っていたブルガド神父の著作『カルタゴの夕べまたはカトリック司教、ムフティー、カーディーの対話』では、アルジェリア出身のカーディーとムフティー、フランスからのキリスト教司祭、修道女との相互の宗教についての「対話 (dialogue)」が描かれる<sup>9)</sup>。しかしキリスト教が主導していた原住民との交流が植民地主義とともに有する「文明化の使命」を標榜し、同時に植民地主義を先導した帝国主義がキリスト教に影響を受けていたことは否定できまい<sup>10)</sup>。カトリック組織発行の雑誌『宗

2) Frédéric Monin, “Abd-el-Kader littérateur et philosophe,” *Mémoires de la Société Littéraire de Lyon*, Lyon: imprimerie. de Aimé Vingtrinier, 1868, pp. 135–146.

3) Paul Azan, *L'Emir Abd el-Kader 1808–1883: du fanatisme musulman au patriotisme français*, Paris: Hachette, 1925; Louis Lataillade, *Abd el-Kader, adversaire et ami de la France*, Paris: Pygmalion, G. Watelet, 1984.

4) Abdeljelil Temimi, “L'Emir Abdelkader face à la problématique du rapprochement avec les civilisations, les religions et les peuples,” *Revue d'Histoire Maghrébine/al-Majalla al-Tārikhīya al-Maghāribīya*, vol. 35 (132), 2008, pp. 33–45.

5) Baptistin Poujoulat, *La verite sur la Syrie*, tome2, Beyrouth: Dar Lahad Khater, 1986. pp. 365–369.

6) Henri Teissier, “L'entourage de l'émir ‘Abd el-Qādir et le dialogue islamo-chrétien,” *Islamochristiana*, no. 1, 1975, pp. 41–70.

7) Ahmed Bouyerdene, “L'émir Abd el-Kader à Pau: Exemple d'un dialogue religieux au XIXe siècle,” *Studia Islamica*, nouvelle édition, 2, 2011, pp. 125–154.

8) “Conférence du 7 décembre 2004 à Lyon de Mgr Teissier et de M. Boutaleb,” pp. 1–15; <http://www.ldh-toulon.net/spip.php?article430> (2012/07/31 閲覧) .

9) L'abbé Bourgade, *Soirées de Carthage ou dialogues entre un prêtre catholique, un muphti et un cadī*, Paris: Typographie de Firmin Didot frères, 1847.

10) Jacques Lanifry, “Islamic-Christian Dialogue: Approaches to the Obstacles,” *Christianity and Islam: The Struggling*

教の友 *L'ami de la religion, journal ecclésiastique, politique et littéraire*』は国家によるアルジェリア征服、植民地化を支持しローマ時代に興隆をアルジェ、カルタゴにおいて極めたアフリカ教会（l'Église Afrique）の復権を唱えた。このような背景での宗教理解とは相互理解の視点に立つものではなく、征服者が一方的に被征服者の宗教や文化を批判する傾向が顕著である。しかし他方で、他の宗教を理解し自らの宗教を護ろうとする試みは古くから存在していた。宗教間が内包する齟齬、宗教間の区別は依然として解消されないものであるとしても、9世紀におけるムスリムのハーシミーとキリスト教徒のキンディーとの往復書簡は、お互いの宗教について批判し合い、互いに自らの宗教を護り改宗を迫ろうとするものである<sup>11)</sup>。したがってワット [1967] が、キリスト教の根幹であるイエスの再生、マリアの処女懐胎についてのイスラームの批判を挙げているように、お互いの宗教を理解しながらも、宗教間の本質的な乗り越えがたい壁を意識せざるを得ない<sup>12)</sup>。

以上から本論では、アブドゥルカーデイルのフランスでのキリスト教徒との交流にキリスト教という他宗教に対する理解の糸口をある程度もたらす役割を認めつつも、「宗教間対話」としての立場をとらないこととし、アブドゥルカーデイルの他宗教についての理解を彼のキリスト教理解の事例から述べる。

なお、本論文は以下のように構成されている。まず第2節でアブドゥルカーデイルの実際の行動を整理して、彼とキリスト教徒との接触についての概略を述べ、次に第3節でその著作に基づいて、彼のキリスト教徒に対する認識について述べ、最後に第4節でアンボワーズ市文書館に収められている手紙を中心に、彼のキリスト教徒観についての分析を行う。以上を総合して、第5節でアブドゥルカーデイルのキリスト教徒認識の特徴について考察する。

## II. アブドゥルカーデイルとキリスト教徒との接触

アブドゥルカーデイルはフランスに降伏した際、アレクサンドリア、またはアッカに彼を家族や部下たち一行とともに連れて行くという約束をフランス軍の代表と交わした。しかしこの約束をフランス側が守ることはなく、アルジェリアを蒸気船で出発した彼らが連行されたのは、南フランスのトゥロンでありそのまま拘留された。アブドゥルカーデイルの嘆願は実を結ばないまま、スペイン国境に近いポー、さらにロワール河ほとりのアンボワーズの古城に移送された<sup>13)</sup>。アブドゥルカーデイルはこのような状況から意識を遠ざけるかのように、思想探求に専心するようになった<sup>14)</sup>。

ちょうどこのころ、キリスト教司祭との交流の機会が増加したといえる。しかし拘留されたアブドゥルカーデイルへのフランス人の接触は、フランス政府に彼を同調させ、さらにはキリスト教に改宗させるという意図をもって行われていた側面が指摘されよう<sup>15)</sup>。ブーイェルディンは1848年、アブドゥルカーデイルがフランス人の訪問者と対談した際、ローマに赴き教皇ピウス9世と会談す

*Dialogue*, Richard W. Rousseau, S.J., Chicago: Ridge Row Press, 1985, pp. 15–27.

- 11) Pasteur Georges Tartar, *Dialogue islamo-chrétien: sous le calife Al-Ma'mûn (813–834), les épîtres d'Al-Hashimi et d'Al-Kindi*, Paris: Nouvelles Editions Latines, 1985.
- 12) W. Montgomery Watt, "The Christianity Criticized in the Qur'an," *The Muslim World*, 67 (2), April, 1967; pp. 197–201.
- 13) Félix Mornand, *La vie arabe*, Paris: Michel Lévy Frères, 1856; Jean-Louis Sureau, Alexis Feuvarc'h, *L'Emir Abd el-Kader à Amboise 1848–1852*, [n.p.]: Fondation Saint-Louis, Château Royal d'Amboise, [n.d.].
- 14) Paul Azan, *L'Emir Abd el-Kader 1808–1883: du fanatisme musulman au patriotisme français*, Paris: Hachette, 1925.
- 15) Ahmed Bouyerdene, "Origine et originalité de la controverse religieuse initiée par Abd El-Kader al-Hassani avec les Chrétiens," *Abd El-Kader, un spirituel dans la modernité: sous la direction d'Eric Geoffroy*, Paris: Dar Albouraq, 2010, pp. 21–31.

ることについて同意した事例を、政治的な文脈に拘束されたものでありながらも、宗教間対話の先駆と論じている。アブドゥルカーディルがキリスト教について一定の理解を示しフランス人と長時間の対談を行っていたことは注目すべきことかもしれない。しかし彼の同意したローマ訪問は、フランス人からの提案に対してのものであり、自らが拘束から解放された後、マッカへの道中に立ち寄るとする条件のもとでの同意であったことには注意が必要であろう<sup>16)</sup>。

アンボワーズに拘留されていたアブドゥルカーディルのもとには多くのフランス人が訪問した。元アルジェ司教デュピュシュは、アブドゥルカーディルを訪問し彼の解放を求めてルイ・ナポレオンに嘆願した<sup>17)</sup>。実は彼の拘留に先んずる1841年、フランス軍とアルジェリア軍双方の捕虜の交換が行われ、この交換を主導したのがアルジェ司教デュピュシュであった<sup>18)</sup>。このとき現場で交換に立ち会ったデュピュシュ神父は、アブドゥルカーディルと残りの捕虜を返還する交渉を行い、イエスや三位一体、イエスの復活などの話題をめぐって対談したことを記録している<sup>19)</sup>。

拘留中に執筆された著作、『無為と背教によりイスラームの宗教を侮辱する者の舌を切る鋭い鋏 *al-Miqrāḍ al-Hādd li Qaṭ' Lisān Muntaqish Dīn al-Islām bi al-Bāṭil wa al-Ilhād*』はアンボワーズ拘留時、あるカトリック聖職者が、イスラームを非難したことに対する反論として執筆された<sup>20)</sup>。同書においてアブドゥルカーディルは、イスラームの正当性を主張し、イスラームの義務の遂行について詳述している。ここでは異教徒との契約の遂行についてかなりの頁が割かれ、安全保障を敵から受けた捕虜 (*asīr u'tumina*) には、たとえ単独であれ裏切りは禁止される等の記述がみられる。ヘルファは本書でのアブドゥルカーディルのイエスやキリスト教徒理解は、時間や場所に限定されていたとはいえ、19世紀におけるイスラームとキリスト教の相互理解の一端であるとする<sup>21)</sup>。他方ラガルドはこの著述活動について、彼の前半生の“剣のジハード”と対比して“ペンのジハード”と位置づけている<sup>22)</sup>。同書におけるイエス、キリスト教徒の解釈は、同時期にキリスト教司祭の要望を受けて執筆された『自伝』でも展開されている。またキリスト教聖職者以外にも、アブドゥルカーディルに理解を示したアルジェリアの元ムアスカル大使ドマ (Eugène Daumas)<sup>23)</sup> らは彼の解放を求め政府に働きかけた。

1852年10月16日、アブドゥルカーディルはルイ・ナポレオンによる解放の宣言を受ける<sup>24)</sup>。彼は中東への居住をフランスの監視の下許可された。アブドゥルカーディルは一見恭順な態度をナ

16) Alfred de Falloux, “Une entrevue avec Abd-El-Kader,” *L'Ami de la religion*, tome 139, no. 4692, Paris: Imprimerie d'Adrien le Clerc et Cie, jeudi 9 novembre 1848, pp. 381–389.

17) Antoine-Adolphe Dupuch, *Abd-El-Kader au château d'Amboise*, Bordeaux: Faye, 1849; ———, *Abdel Qader, sa vie, sa lutte avec la France, son souvenir*, Bordeaux, Paris: Bourgeois de Soye, 1860.

18) Ahmed Bouyerdene, *Abd El-Kader: L'harmonie des contraires*, Editions du Seuil, 2008, p. 85; Abbé Suchet (Vicaire général d'Alger), *Lettres édifiantes et curieuses sur l'Algérie*, Tours: Ad Mame et Cie, 1840, p. 405.

19) Suchet 1840, pp. 400–401.

20) al-Amīr ‘Abd al-Qādir al-Jazā’irī, *al-Miqrāḍ al-Hādd li Qaṭ' Lisān Muntaqish Dīn al-Islām bi al-Bāṭil wa al-Ilhād*, Bayrūt: Dār Maktaba al-Ḥayāt, 1972?; Muḥammad ibn ‘Abd al-Qādir al-Jaza’irī, 1964, p. 543.

21) Benaïssa Khelfa, “La Bible lue par un musulman du XIX<sup>ème</sup> siècle,” *Les Cahiers de l'Institut des Hautes Études Islamiques*, no. 3–4, septembre 1996/ avril 1997, pp. 55–75.

22) Michel Lagarde, “Un exemple de la position akbarienne sur le Jihād,” *La liberazione dei ‘cattivi’ tra cristianità e islam, oltre la crociata e il gihād: tolleranza e servizio umanitario, atti del congresso interdisciplinare di studi storici (Roma, 16–19 settembre 1998) organizzato per l’VIII centenario dell’approvazione della regola dei Trinitari de parte del Papa Innocenzo III il 17 dicembre 1198/15 sqfar, 595H, a cura di Giulio Cipollone*, Città del Vaticano: Archivio Segreto Vaticano, 2000, pp. 629–633.

23) 彼の著作『サハラの馬と砂漠の慣習』にはアブドゥルカーディルの馬に対する見解が掲載されている (Eugène Daumas, *Les chevaux du Sahara*, Paris: Chamerot, 1851)。

24) Eugène de Civry, *Napoléon III et Abd-El-Kader, Charlemagne et Witikind: étude historique et politique: contenant un grand nombre de lettres et de documents inédits*, Paris: P. Martinon, Libraire-Éditeur, 1853, p. 323.

ポレオン政府に対して示していたかのである。1852年11月20日には、ルイ・ナポレオンをフランス皇帝とする人民投票への参政権を要求して、アンボワーズの市長に手紙を書いたことが官報『世界の監視者 *Le Moniteur Universel*』に伝えられている。以下はその抜粋である。

我々の子供たちは、フランスで生まれ、あなた方の娘たちに乳を与えられた。我々と共にあった人々はあなたの国で死に、あなた方の間に眠る。そしてスルターン（ルイ・ナポレオン）は正義の中の正義であり、彼自身の手で私に剣を渡し、彼らの子供たち、彼らの兵士の中に私を加えた。私たちはしたがって自分たちを今日からフランス人として考えなければならない<sup>25)</sup>。

彼は解放を許したナポレオンの厚情に感謝の意を表明し、自らとその一行をフランス人としてみなしているのであるとフランス政府に対して伝えている。特に自らをフランスの兵士とすることが、選挙権を獲得する根拠を強くしている。もっともこの時代のアルジェリア人について明確な身分規定はなかったのだが、このような彼の態度は、フランスへの恭順、フランス皇帝の忠実な臣民<sup>26)</sup>として彼を位置づけることとなった。たとえばレジオン・ドヌール勲章をナポレオン3世から授与されたこと、スエズ運河工事完成式への出席はフランスによるアラブ人支配の象徴と位置づけられている<sup>27)</sup>。彼はパリでクリミア戦争でのフランスの勝利を祝したカトリックの儀式テデウムにも出席した<sup>28)</sup>。これらの態度は表面上、フランスの政治や宗教を受け入れているかのようにみえる。しかしアブドゥルカーデイルは盲目的にフランスに追随していたわけではない。

### III. キリスト教徒に対するアブドゥルカーデイルの認識

それではアブドゥルカーデイルの著作におけるキリスト教徒観について、その著作からみていくこととする。

#### 1. アブドゥルカーデイルの思想におけるキリスト教徒について

1849年にはあるキリスト教司祭に依頼され、アブドゥルカーデイルの初めての自伝が執筆された。本書の内容はアブドゥルカーデイルとフランスとの間の戦争と、アブドゥルカーデイル自身について述べるものである。この自伝中の第6章「東方正教会教徒の系譜と彼らの主要な特徴について *Fi Nasab al-Rūm al-Qaysariya wa Dhikr Khasīl Awā'il-hum*」において、キリスト教徒 (*naṣārā*) についての多くの記述がみられる<sup>29)</sup>。

通常クルアーンにおいてイエス、聖母マリア、キリスト教については肯定的な評価も否定的な評価も存在する。肯定的評価としてはマリアの懐胎を神の御業とし、キリストを慈愛に溢れたものとして述べている。しかしその中でイエスを「神の子」とする受肉や三位一体の概念は強く否定され

25) *Le Moniteur Universel*, no. 328, 1852年11月23日（下線部執筆）。

26) Manuela Semidei, “De l’Empire à la décolonisation à travers les manuels scolaires français,” *Revue française de science politique*, 16<sup>e</sup> année, no. 1, 1966, pp. 56–86.

27) Ferdinand de Lesseps, *Souvenirs de quarante ans dédiés à mes enfants*, Paris: Nouvelle Revue, 1887.

28) Christian Delorme, *L’émir Abd-el-Kader à Lyon: 12–13 décembre 1852*, Lyon: M. Chomar, 2008.

29) al-Amīr ‘Abd al-Qādir al-Jazā’irī, *Mudhakkirāt al-Amīr ‘Abd al-Qādir: Sīra Dhātīya Kataba-hā fī al-Sijn sana 1849*, Muḥammad al-Ṣaghīr Bannānī; Maḥfūz Samāfī; Muḥammad al-Ṣāliḥ Aljūn (eds.), al-Ṭab’a 4, al-Jazā’ir: Sharika Dār al-Umma, 2004, p. 258 (仏訳: al-Amīr ‘Abd al-Qādir al-Jazā’irī, *L’émir Abdelkader: autobiographie écrite en prison (France) en 1849 et publiée pour la première fois*, H. Benmansour (tr.), Paris: Dialogues édition, 1995); 第6章ではキリスト教について論じられており、ティッシエが論文を発表している (Teissier, 1975)。

てきた<sup>30)</sup>。

アブドゥルカーディルは三位一体、キリストの受肉、キリストの死について、キリスト教徒の見解が一致していない状況を指摘して批判する。しかし以上の議論で引用されているのはヤコブ派とメルキト派のような古代のキリスト教徒の見解であり、アブドゥルカーディルが実際に対峙したカトリックやプロテスタント教徒についての言及はない。それでも彼は同時代のキリスト教徒 (al-muta'akhhirūna) を古代のキリスト教徒と区別し、「われわれはよくわれわれの時代のキリスト教徒と議論してきた」と言及し、彼らの中では受肉や三位一体についての意見の食い違いがなかったとする。しかし彼が実際に対話したフランス人捕虜に代表されるキリスト教徒が、預言者であるムハンマドとイエスは諸宗教の信仰者すべてが信ずべきではなく、各々の信仰者にもみ遣わされていること、キリストがユダヤ教徒に殺害されたのではなく生きてそのまま昇天したことについて語っていることを批判的に指摘する<sup>31)</sup>。

## 2. アブドゥルカーディルの思想における啓典の民について

ダマスカスでのアブドゥルカーディルの思想探求の集大成である著作、『諸階梯の書』においてまず、キリスト教はイスラームとともに一神教を信仰する啓典の民 (ahl al-kitāb) であることが述べられている。啓典の民とは通常、クルアーン、トーラー、福音をそれぞれ啓典とするムスリム、ユダヤ教徒、キリスト教徒に限定されることが多い。しかし偶像崇拜者と対置される諸宗教としてはサービア教徒、ゾロアスター教徒にも拡大されることのある概念である<sup>32)</sup>。クルアーンにおいて「本当に信じる者、ユダヤ教徒とキリスト教徒とサービア教徒で、アッラーと終末の日を信じて善行に励む者には恐れもなく憂いもないであろう (2章62節)、(5章69節)」と述べられている。歴代のイスラーム王朝において啓典の民は庇護民 (dhimmī) とみなされ、各々の宗教実践によって彼らにも来世での救済がもたらされると考えられてきた<sup>33)</sup>。

アブドゥルカーディルの著作のひとつ、『知性ある人への喚起、無関心な人への忠告 *Dhikrā al-'Aqil wa Tanbīh al-Ghāfil*』において、啓典の民とされる人々には様々な民族が含まれ、いずれも知識を授けられた神の選良として記述されている。たとえば、インド人はサービア教徒と認識されており、ペルシア人はサービア教からゾロアスター教に改宗した人々、ローマ人はサービア教からキリスト教に改宗した人々、フランス人はキリスト教徒との言及はないものの、ナポレオン3世は神の助けを得た勝利者と記述され、アラブ人はムスリム、ヘブライ人はユダヤ教徒、エジプト人はコプト教徒として述べられている<sup>34)</sup>。これらの啓典の民とは知識ある人々と言及され、彼らのもつ知識については優劣といった区別は設けられていない。

アブドゥルカーディルはこのような啓典の民について、ムスリムと同じ神の慈悲を受けることができると言及する。彼はまずクルアーンの「私の慈悲は万物を包摂する。そして私を畏れ、施しをする者にそれを命じる (7章156節)」という章句を引用する。次に別の二つの章句、「我々の主、

30) David Marshall, "Christianity in the Qur'ān," Lloyd Ridgeon (ed.), *Islamic Interpretations of Christianity*, Richmond, Surrey: Curzon Press, 2001, pp. 3-29.

31) al-Jazā'irī 2004, pp. 269-270.

32) サービア教とは、イスラーム以前にアラビア半島で信仰されていた宗教であるとされる。

33) Michael Winter, "A Polemical Treatise by 'Abd al-Gānī al-Nābulūsī against a Turkish Scholar on the Religious Status of the *Dimmīs*," *Arabica*, tome 35, 1988, pp. 92-103.

34) ギリシア人にかんしては哲学的営為、新約聖書の翻訳の事例を述べているにもとどまらず彼らの属していた宗教が何かに関しては言及がない (al-Amīr 'Abd al-Qādir al-Jazā'irī (Émir Abd el-Kader), *Le livre d'Abdelkader: rappel à l'intelligent, avis à l'indifférent (Dhikra al-'aqil wa Tanbih al-Ghafil)*, Gustave Dugat (tr.), Tunis: Bouslama, 1980, pp. 150-183)。

あなたの慈悲と知恵は万物を包摂する（40章7節）」と「彼は彼らの持っている（啓典）律法と福音の中に見出され記される者である（7章157節）」から、彼は神の慈悲を以下の二つ——①あまねく万物を包摂する一般的な慈悲、②啓典の民に特有の慈悲であり神が自らにそれを与えることを課す慈悲——に分類する。さらに啓典の民においてトーラーと福音書は特別な意義を付与されている。『それを命じる（7章156節）』という章句については「二つの啓典の民（ahl al-kitābay ni）、つまりトーラーと福音書の人々」に結びつく義務であり、啓典の人々でないならこのような慈悲を享受することはないのである（第250階梯）<sup>35)</sup>。

啓典の民についてしばしば引き合いに出されるアブラハム的一神教の側面について、アブドゥルカーデイルは、「神の友イブラーヒームの精神性（rūhānīya Ibrāhīm al-khalīl）」として以下のように言及している。

神の友の教え（milla al-khalīl）は寛大な教え（al-milla al-samhā'）であり偏狭さと苦行はない。それはムハンマドの教え（milla Muḥammad）である。なぜなら神は『そして宗教においてあなた方に苦行を押し付けない（22章78節）』とおっしゃったからである。そして彼は言った。『（これは）あなた方の祖先イブラーヒームの教え（22章78節）。』したがって掟の責任を負う者にとって偏狭で苦行であるものはすべてムハンマドの宗教（dīn Muḥammad）に属さず、それに起因せず、それによってもたらされたのではない（第248階梯29）<sup>36)</sup>。

ここから寛大な教えであり、偏狭と苦行ではないとされるイブラーヒームの教えについて、彼が預言者ムハンマドの教えについても同じと述べていることがわかる。

また人類の祖、アダムがすべての人々つまり理性を与えられたすべての動物の源泉であり父であるように、唯一性を純粹に表明し、宇宙の主に対する一徹な方向性を表明するイブラーヒームは、彼の宗教に従った者たちの集合である。しかしながらイブラーヒームとアダム、彼ら双方にとっての父（ab）であり源泉（aṣl）であると言及されるのが、イスラームの預言者ムハンマドなのである（第183階梯）<sup>37)</sup>。しかしここでイブラーヒームは全人類を総称するものとして、アダムは理性をもつ凡ての動物を代表するものとして述べられているのであり、つまり預言者ムハンマドは全人類に対してもたらされたと言及するにほかならない。

すなわちアブドゥルカーデイルによると、ムハンマドこそが一神教の源泉であり、イブラーヒームとアダムを超えた包括性を持ち、預言者ムハンマドへの信仰を欠くイスラーム以外の他宗教は不完全と位置づけられ、ユダヤ教徒、キリスト教徒、多神教徒、その他の人々はムハンマドに対する不信仰（kufr）から彼への信仰（īmān）に至る改心（tawba）の命令を受けている人々である（第257階梯）としている<sup>38)</sup>。ここでいう不信仰とは、預言者ムハンマドを信仰していないという意味で限定的に用いられている。そこで彼は自らが信仰するイスラームを他の宗教と比べて優越したものと主張しているのである。

35) al-Jazā'irī, *Kitāb al-Mawāqif*, vol. 2, p. 749.

36) al-Jazā'irī, *Kitāb al-Mawāqif*, vol. 2, p. 701; イブラーヒームは『クルアーン』において神の友、非異教徒（ḥanīf）、真実を話す者、預言者として言及され、彼がカーバ神殿で偶像を破壊し、息子イスマーイールを神のため犠牲にしようとしたことが述べられている（R. Paret, "Ibrāhīm," *EI*<sup>2</sup>, p. 980）。

37) al-Jazā'irī, *Kitāb al-Mawāqif*, vol. 1, p. 404.

38) al-Jazā'irī, *Kitāb al-Mawāqif*, vol. 2, p. 776.

#### IV. フランス人との手紙

それでは実際、フランスのキリスト教聖職者との文通においてこのような宗教についての議論が行われることがあったのか。またイスラームにおける宗教的な考えはどのように説明されたのであろうか。

アブドゥルカーデイルの手によるフランス人への手紙は、フランス国内の文書館や、フランス人による著作の中に多く残されている。彼はとりわけ拘留中のアンボワーズの制限された状況下において、フランス人との文通を行ってきた<sup>39)</sup>。アンボワーズ市文書館 (Archives Communales d'Amboise) には、「主任司祭ラビオン氏寄贈、アミール・アブドゥルカーデイルの未発表の書簡類」と題してアブドゥルカーデイルの手紙が収蔵されている<sup>40)</sup>。これらの手紙は、アブドゥルカーデイルと親交があったアンボワーズ市主任司祭であったラビオン神父 (Louis François Rabion 1811?–1873) が1870年12月4日に市に寄贈したものである<sup>41)</sup>。ラビオンに対して書かれたアブドゥルカーデイルの手紙は全部で12通ある。市長、修道女モリスなどラビオン以外への手紙を合わせると総計27通ある。書かれた時期は、1852年1月20日から1865年8月30日までであり、アブドゥルカーデイルはブルサ、ダマスカスに移った後も、アンボワーズに手紙を送り続けている。特に彼がアンボワーズを去った1852年が一番多く、最後の手紙の時期と重なるのが1865年8月28日、アブドゥルカーデイルのアンボワーズ訪問である。手紙にはアラビア語の原本にフランス語訳が原本と同一の紙面上、裏側、別紙に書かれて添付されている。手紙の翻訳者は明記されていないことがあるものの、名前が挙がっているのはジョルジュ・ビュッラ (Georges Bullad)、イスマイル・ユルバン (Ismaïl Urbain)、アントワヌ・ビュッラ (Antoine Bullad) の三名である<sup>42)</sup>。ジョルジュ・ビュッラはアブドゥルカーデイルがブルサ、ダマスカスに移住してからも彼の通訳を務め続けた軍事通訳である。これらの手紙のコピーはマルセイユ商工会議所にも収められている<sup>43)</sup>。以下、手紙のあて先別に司祭とそれ以外としてみていくこととする。

##### 1. 司祭との手紙

1853年2月19日、1855年12月18日の日付でラビオンに宛てた手紙では、新年の挨拶とともに元アルジェ大司教デュビュシユの死を悼むことを伝えている (1856年12月29日)。このラビオンを介し、アブドゥルカーデイルはトゥール大司教モルロとも知り合い、彼を讃える詩を書き送っている。まず、アブドゥルカーデイルがアンボワーズにおいてルイ・ナポレオンから解放の宣言を受けた後、ラビオン神父に宛てて書かれた手紙を検討する。

唯一の神に讃えあれ

39) アブドゥルカーデイルらはアンボワーズ城において必要なものを与えられ習慣を尊重され、市街に外出を許されるなど一定の自由を与えられていた一方、城内部の衛生状態は悪く伝染病で亡くなった者も多かった (Alfred Gabeau, "L'émir Abd-el-Kader à Amboise," *Bulletin de la société archéologique de Touraine*, tome 11, 1898, pp. 348–383)。

40) *Le travaux inédits les pièces de correspondance de l'Emir Abd el Kader léguées par Monsieur Le Curé Rabion*, H:IV (104), Archives Communales d'Amboise.

41) Gabeau 1898, p. 351.

42) ビュッラはアブドゥルカーデイルがブルサ、ダマスカスに移って以降も彼の通訳、フランス側の監視役を務めていた人物である。アントワヌはビュッラの息子である (Temimi 1978b. Lettre no. 129: ビュッラの妻宛て、アブドゥルカーデイルの手紙より 1857年9月23日)

43) これらの手紙のあて先は数多くその相手はナポレオン3世、軍の関係者、修道女、駅長まで多数である (*Copie des lettres écrites par Abd el Kader (registres de la main de l'interprète Georges Bullad), Amboise et Brousse 1851–1853, Damas 1855–1879, antérieures à 1801 série LXI*, article no. 20–21, Fonds de Barbarin, Archives de la Chambre de Commerce de Marseille)。

愛される卓越した閣下であり神に近づくために現世での欲求を放棄したシディ・ババサ (babāṣ)、アンボワーズ司教、ラビオン、貴方の上に平安あれ。神の慈悲と恩寵が貴方を覆いますように。

全能なる神はあなたのため寛大な心を与え、さらにすばらしいのはナポレオン王子です (神が彼に勝利とその維持を与え、すべての過ちからお守りくださいますように)。彼は我々に自由を与え、我々にすべての善行を成しました。この幸福な結果を私たちは、貴方の祈りとよきとりなしと考えております。神のみが私たちの恩義に対して貴方に報いることができます。しかしどの場所であっても、私たちの場所、貴方の友情の思い出はいつも私たちとともにあります。

アブドゥルカーディル・イブン・ムフィッディーンからの挨拶

1269年ムハッラム月4日 (1852年10月1日)

翻訳ジョルジュ・ビュッラ

この手紙からは自らの解放に対するラビオンへのとりなしへの感謝の言葉が述べられ、自らを解放したナポレオンについての賛辞が示されている。そしてこの手紙の言葉通り、アブドゥルカーディルはラビオンとの友情を忘れず、新年の挨拶の手紙を彼に送り続けることになる。さらにその8年後に送られた手紙ではアンボワーズとラビオンとの帰属をより一層明確にし、アンボワーズの人々への呼びかけを行っている。

アブドゥルカーディルからラビオン神父へ

神に讃えあれ

神に身を捧げた人、有徳の士、非常に博学の、炯眼の、卓越した司祭 el Sid ラビオン、アンボワーズの宗務を委ねられ、尊敬されている方へ。

なんと至高なる神が貴方に特別のはからいをお保ちで、ふんだんにお与えのことでしょう。なんと神は貴方に高貴な司祭職に必要な恩寵をお与えのことでしょうか。なんと神はそのことを私たちの願いと私たちの望みと私の抱く貴方への敬意につりあわせることでしょうか。

私は年が改まる時、私たちの真心のこもった友情の気持ちをおのずから表し交わそうとさせる機会を祝福いたします。私はそれ (友情) を、それが私に猥下、貴方と私が心から愛するメシアに続く貴方の子供たちと、分け隔てなくすべてのアンボワーズの住民のための私のお願いの言葉を新しくお伝える貴重な美質を与えるだけ一層お祝いしその真価を認めます。

私は貴方に私の気持ちすべてで書いた証言を個人的にお伝えます。貴方にそれを前記の貴方の子供たちにお伝えするようお願いいたします。なんと神は貴方と彼らの上に彼の祝福と恩恵を広げることでしょうか。そしてなんと彼は、健康、体力、喜び、至福をお与えになり、貴方と彼らの生涯を末永きものにするのでしょうか。この手紙から私のお祝いの言葉とともに、貴方がたすべてへの私の友情と愛情のこもった気持ちの言葉をお受け取りください。同様に私の敬意の証をご理解ください。

神が貴方をお元気であらせられますように。

貴方の誠実なアブドゥルカーディル、ムフィッディーンの子息

ダマスカス、1864年12月27日

以上からアブドゥルカーディルが手紙において、主に新年の挨拶の機会に、ラビオン神父に対する友愛の念を表明しながら、さらにアンボワーズ住民全体——大きい者も小さい者も、男性も女性も——に対する挨拶を述べていることがわかる。この手紙において彼のキリスト教徒への思いは、友情や温かい思い出という言葉で語られる一方、宗教的な内容に踏み込んで議論してはいない<sup>44)</sup>。

## 2. アンボワーズ市長との文通

続いてアンボワーズ市長との文通から考察する。1860年のダマスカスでのキリスト教徒救済について、アンボワーズ市長と市議会議員はアブドゥルカーディルを賞賛して手紙を送った。以下、ガボ (1898) から抜粋する。

シリアにおけるキリスト教徒の守護者、アミール・アブドゥルカーディルへ

アミール、

我々はシリアにおけるキリスト教徒の守護者への賞賛にフランスが感謝していることを大変喜ばしく思い、貴方がアンボワーズに言った言葉「私は貴方たちの一人だ」を思い出します。

そうです。貴方は全能者の御意が貴方の運命をフランスの運命に従わせたそれ以前に、高貴さと勇気によって私たちのうちの一人です。

我々の壁の中に貴方を体制が捕虜として拘留した際に、私たちのうちの一人でした。我々には不幸のただ中での貴方の魂の偉大さと貴方の力を讃えます。我々是我々の宗教と我々の国民の性格によって貴方に同情し、貴方を愛し、貴方を慰めるのです。

東洋の美しい空の下で、貴方が出来うる限り我々の兄弟を救助して、我々の代理を務めた以上、今や貴方はかつてないほど我々の中の一人です。貴方の既に輝かしい歴史において、ムフィッディーンの息子よ、貴方の忠実な行動が最も美しい頁の一枚を占めるでしょう。

また、我々アンボワーズ市議会議員は、市を代表するため我々の同国人によって選ばれりと速やかに取り急ぎ集結し、満場一致で貴方に我々の感謝を捧げ、貴方がかつて伝えた言葉が我々の誇りであり、もう一度貴方の口から出る「私はあなた方の一人です」を聞きたいと貴方に伝えることを決定したのです。

我々はみな互いに愛し合うことを期待されている神の子供たちです。フランスがシリアに、知識を与え苦痛から解放する使命を帯びた司教と修道士を送ったのはこのためです。貴方は悪人が彼らに善行を施した者を虐殺するのをご覧になりました。そして信仰者の中で最も敬虔であり、最も教養ある貴方は、彼らを兄弟のように助けたのです。

すべてのフランス人の謝意は我々の皇帝が貴方の功績を認める尊敬に値する報酬です。我々はそこに特に我々の賞賛を結びつけ、貴方がこれからもキリスト教徒を愛し保護することができるよう、貴方に靈感を与えた神に、光、力、長い命を希います。

アブドゥルカーディル、ムフィッディーンの息子への挨拶

彼にとって大切な都市、アンボワーズ市長と市議会議員より<sup>45)</sup>

44) たとえば、「宗教間対話」についての著作のあるブルガド神父は、同著作を呈呈しアブドゥルカーディルに手紙を送り感想を求めている。しかし、アブドゥルカーディルは取り急ぎの返礼のみで、議論に応じることはなかった (Temimi, 1978a, p. 174)。

45) アンボワーズ市長からの手紙の日付は、アブドゥルカーディルのこの手紙への返信より後の11月8日となっている (Gabeau 1898, pp. 378-379)。

以上の手紙から、アンボワーズ市長と議員たちが、アブドゥルカーデイルに対して、彼のダマスカスでの功績を讃えながらも、彼のフランスへの帰属を繰り返し強調していることがみてとれる。さらに彼がキリスト教徒を救ったことはひとえにフランスの意向であり、彼は代理なのであるとする。さらに今後もフランスの影響下にあるシリアのキリスト教徒の守護者となることを期待している。それに対して彼が返信した手紙について以下考察する。

唯一の神に讃えあれ。非常に尊敬すべき、非常に傑出した、大いに恩恵をもたらされる、アンボワーズ市長と市議会議員閣下

私たちはあなたの貴重なお手紙を受け取りました。それはダマスカスで神が私たちに吹き込まれた行いが、どれほどあなたの方のお心を喜ばせたかを私たちに示すものでした。なぜならあなた方は私たちにキリスト教徒を防御したことと、残酷な死から多くの人々を救助したことに對して沢山の感謝の気持ちを送ろうとお望みだからです。私はあなた方の非常に好意ある感謝に値しません。なぜなら私はムハンマドの法 (al-sharī'a al-Muḥammadiya) と人道 (al-murū'a al-insāniya) が命じる義務に従い、私たちの兄弟のため、私の命を危険に晒しながら人間の道に従ったに過ぎないからです。不幸にも、いかなる権力も私をひどく驚かせた虐殺を予測することができず、私は努力にもかかわらず、これらの恐ろしい災禍を阻止するために決めたことすべてを実行できませんでした。また私は、スルターン・ナポレオン3世——私たちのための非常に多くの恩恵を決して忘れません——が私の榮譽を讃えてくださる特別のお計らいに対し、自分が十分に値するとは思いません。

私は至高なる神に、常に願うものであるあなたがたの幸福をご祈念いたします。なぜなら私は自らをアンボワーズの都市の住民とと思っているからです。私の心はいつもそれ (アンボワーズ) を思い、私の子供たち、私の家族すべては私たちに対するアンボワーズの人々すべての献身を忘れません。そして私たち全員は全能なる神に、あなた方に神が祝福をふんだんにお与えになり、あなた方のご健勝をかなわれますようお願い申し上げます。

ムフィッディーンの子息、アブドゥルカーデイルからの挨拶、1277年ラビーウ・サーニ一月5日 (1860年10月21日)

手紙において、1860年7月9-14日にダマスカスのキリスト教徒地区で12,000名ともいわれる多数のキリスト教徒をムスリム暴徒から保護した<sup>46)</sup>ことでの賞賛に対し、彼はアンボワーズ市長に謝辞を述べている。他方アンボワーズ市民の一員と自らをみなしながらも、それはフランス側が期待する役割を果たしたことを意味するのではなく、むしろイスラームの信条に従ったのみであると主張している<sup>47)</sup>。

### 3. イスラームと人道への言及

前述の手紙の中で、彼が自らの行動の基盤として、イスラームと人道の二つの概念を併置して説明していることについてさらに別の資料からみていくことにする。アブドゥルカーデイルはキリス

46) Linda Schatkowski Schilcher, *Families in Politics: Damascene Factions and Estates of the 18th and 19th Centuries*, Stuttgart: Steiner-Verlag-Wiesbaden, 1985, pp. 87-106.

47) アブドゥルカーデイルは1860年のアルジェ司教パヴィ宛の手紙でも人権 (al-Ḥuqūq al-Insāniya/ les droits de l'humanité) の言葉を用いている (Henri Teissier, "Le sens du dialogue inter-religieux," La Fondation Emir Abdelkader (ed.), *Itinéraires*, no. 2, janvier/juin, 1998, pp. 20-22)。

ト教徒に対して暴徒化したムスリムに対してこのように言った。

おお、我らの兄弟よ。貴方がたの行動は不信仰である。我々は貴方がたが人間を殺す権利を持つようなきな臭い時代にいるというのであろうか。貴方がたはどれほど低い段階に陥ってしまっていることか。私はムスリムが女性や子供の血を浴びるのを見てしまった！神はこう言わなかったであろうか——『殺人や地方の騒乱を引き起こしていない人間を殺す者は、人間全体の殺人者とみなされる。』神はまたこのように言わなかったか、宗教にまったく違わぬ方法で——『正しき道は欺瞞から十分に区別される<sup>48)</sup>』。

ここからアブドゥルカーディルは、ムスリムたちに対して彼らの行動の誤りを論じ、神の道から外れた殺人を犯していることを非難している。ここで重要なことは、アブドゥルカーディルのキリスト教徒救済が、フランスやキリスト教諸国である列強に対する機嫌取りで行われたのではないということである。

アージュロンは以下のアブドゥルカーディルの言葉から彼の行動を分析する。

あなた方がしようとしていることに注意せよ。あなた方は、イスラームの名誉を傷つけ、自らを滅ぼし、自らの街を失うだろう。ヨーロッパはあなた方がキリスト教徒に浴びせようとする悪に無感覚ではない。よく考えられよ。(キリスト教の)司教がかつてキリスト教徒の教会であったあなた方のモスクに住み着く事態を引き起こしてはならない。

このような状況でキリスト教徒を救済することは、フランスに奉仕するためでも、イスラームを裏切ることもありえなかった<sup>49)</sup>。ここから彼は自らの行動がいかなる西欧の権力にも従ったものではないと説明していることが読み取れる。イスラームという言葉は宗教職に就かないフランス人たちに対して用いていることで、自らの立場を説明している。

実はアブドゥルカーディルはイスラーム法と人道の表現を既に、フランス軍との戦争において用いていた。アブドゥルカーディルは1841年の戦争再開の後、劣勢にある彼に降伏を提案した、かつて彼のもとで秘書を務めていたフランス人、ロシュに以下のような手紙を送っている。

君が私に戦争をやめさせることは、私の宗教と人類 (humanité) の法によって糾弾される。私は宗教が私に命じ禁止することを知っている。そしてクルアーンの意味をムスリムに教えるのはキリスト教徒ではない。人類の法については、君はまずフランス人に、彼らが私に与えた忠告に従うように言うのがよい。とんでもないことに、彼らは人類の法にもっとも違反しており、彼らを攻撃することのないアラブ人の土地を武力で侵略し、彼らのテントのただ中に瓦礫と悲痛をもたらす者たちである<sup>50)</sup>。

この手紙でも、イスラームと人類の法とは併置されて用いられているとともに、西欧由来の概念としていわれ、宗教・人種を問わず普遍的に尊重されるべき「人権」の概念についてアブドゥルカー

48) Alexandre Bellemare, *Abd al-Kader: sa vie politique et militaire*, Paris: Hachette, 1863, pp. 443–444.

49) Ageron 1970, p. 18.

50) Léon Roches, *Trente-deux ans à travers l'Islam (1832–1864)*, Paris: Firman-Didot, 1884, pp. 380–381.

デイルが理解しながらも、それを守ろうとしないフランスを痛烈に批判する態度がみられる。このような人権について、アブドゥルカーデイルは普遍的な権利として認めながら自らの宗教であるイスラームに従おうとしている。そのことは、フランス拘留時において西欧の思想の影響を受けたというよりは、人類の普遍的概念として彼が人権を理解していたことを説明する。

## V. 結論

アブドゥルカーデイルがキリスト教徒について抱いた、キリスト教徒に対する認識について、先行研究は彼のフランスへの降伏という政治的背景の枠組みの中で論じる傾向が顕著であった。本論でもこの点を認めながらも、アブドゥルカーデイル自身のキリスト教徒に対する観念の問題と、実際の態度の問題の区分を一層明確に分け以下を指摘する。

まず彼のキリスト教徒観は、著作のなかでは啓典の民とされ美德を認められながらも、イスラームとの比較で劣位にあると認識されていた。しかしこのような見解は基本的にイスラームにおいて伝統的に述べられてきた説に則ったものであり、むしろ彼のキリスト教徒観の独自性は、古典的なイスラームの見解を支持する著作の記述よりも、キリスト教徒の国に敗北し、監視下に置かれた実際の立場を反映する手紙の文面にみられる以下の二点を指摘できる。

第一に、アブドゥルカーデイルにとってはキリスト教が、自らが戦い降伏したフランス国家の宗教であるという認識が避けられなかった。1860年のキリスト教徒救済について、彼はアンボワーズ市議会に送った手紙の中で、イスラームの法と人道の両輪こそが自らが従ったものとした<sup>51)</sup>。しかしここで彼はフランス側の政治的思惑に沿った行動と解釈されることを暗に拒否していたのである。彼は当時の中東世界での自らの立場を、フランス国家の政治的軍事的影響下の中で慎重に理解し、イスラームこそが自らの従うべき法と表明しているのである。

第二点目は、第一点目とは反対に、アブドゥルカーデイルがその手紙の中で、キリスト教徒に対する友情と尊敬を示すことを憚らなかつた点である。彼は手紙で司祭ラビオンに毎年の新年の挨拶を送り、フランス人に対する友好的な関係を示してきた。フランス人のなかでも聖職者に対しては、政治的な立場を離れて自らに近い立場と親近感をもって認識していたともいえる。手紙からはお互いの宗教の違いについて議論する傾向が希薄であり、普遍的概念としての人権についての言及などからは、共通の土台の上に成立する宗教の視点が強調されている。ここからアブドゥルカーデイルが、異なる宗教に属する相手との対話が持つ、ややもすると敵対を生みかねない性質を理解していたと捉えられる。

以上からアブドゥルカーデイルのキリスト教徒観は、疎遠と近接の傾向がみられることになる。彼は自らが政治的な理由でフランスに利用されかねないことを熟知しており、その戦略に加担することを避けていた<sup>52)</sup>。フランスの軍事力の圧倒的優勢を理解したアブドゥルカーデイルにとっては、フランス人に自ら手紙を送ることで、自らを西欧の政治競争の中に組み入れるのを防ぎ、戦争の勝者と対等の立場を獲得する狙いがあった。続いて戦争に敗北した後の実際のキリスト教徒との交流では、カトリックへの改宗の危険に晒されることや、軍事・文明の優越を見せ付けられることもあったにもかかわらず、同じ神を信奉する人々としての位置づけが顕著となった。フランスとの争いを再び起こさないという誓約上、彼にとってお互いの宗教の相違についての率直な議論は争いの引き金を生まないように差し控えられたのである。以上からフランス人に対する彼の手紙からは、

51) Teissier 1998.

52) Ageron 1970, pp. 23–25.

フランス国家との政治的な従属関係に依拠せず、宗教的論争を生じない次元におけるキリスト教徒に対する認識が示されるのである。

表. アンボワーズ市文書館収蔵のアブドゥルカーデイルの手紙<sup>53)</sup>

	宛名	手紙に記された日付 (日/月/年) <sup>54)</sup>	言語	
1	ラビオン神父	20/01/1852	亜仏対訳	
2	モルロ神父	29/01/1852	亜仏対訳	
3	ラビオン神父	23/03/1852	仏語訳	
4	ラビオン神父	01/10/1852	亜仏対訳	
5	市長	01/10/1852	仏語	
6	市長	?	亜仏対訳	
7	ラビオン神父	08/12/1852	亜仏対訳	
8	神父(ラビオン?)	20/12/1852	亜仏対訳	
9	ラビオン神父	01-02/1853	亜仏対訳	
10	修道女聖モリス	08/06/1853	仏語	ブルサから
11	アンボワーズの人々	01/01/1854	亜仏対訳	
12	ラビオン神父	01/01/1854	亜仏対訳	ダマスカスから
13	ラビオン神父	01/01/1854	亜仏対訳	アブドゥルカーデイルの印章
14	アンボワーズの人々	28/12/1855	亜仏対訳	
15	アンボワーズの人々	29/08/1856	仏語	郵送用封筒あり
16	ラビオン神父	29/08/1856	亜仏対訳	
17	ラビオン神父	02/01/1857	亜仏対訳	
18	ラビオン神父と市長	01-02/1859	亜仏対訳	
19	ラビオン神父	02/01/1860	亜仏対訳	
20	アンボワーズの人々	29/08/1860	亜仏対訳	
21	Adolphe Huan	01/10/1860	仏語	
22	?	09-11/1860	仏語	
23	アンボワーズの人々	01/1862	亜仏対訳	
24	ラビオン神父	27/12/1864	亜仏対訳	
25	神父(ラビオン?)	17/01/1865	仏語	アブドゥルカーデイルの印章
26	?	30/08/1865	仏語	
27	?	?	仏語	

### アブドゥルカーデイル関連年表

- 1807年 アルジェリア西部カーディリー教団(al-Ṭarīqa al-Qādirīya)の指導者の家庭に誕生
- 1826年 ハッジを行う(-28)
- 1830年 フランスのアルジェ占領
- 1832年 戦闘の長(amīr)としてジハードを宣言
- 1834年 仏との和平協定デミシェル協定締結
- 1837年 仏との和平協定タフナ協定締結、アルジェリアの領土の3分の2を統一
- 1839年 仏軍との戦争再開、『騎兵隊の旗と勝利のムハンマドの勲章 *Wishāḥ al-Katā'ib wa Zīna al-'Askar al-Muḥammadī al-Ghālib*』執筆
- 1841年 キリスト教司祭デュピュシュとの捕虜交換
- 1847年 敗北、仏で拘留
- 1849年 自伝、『無為と背教によりイスラームの宗教を侮辱する者の舌を切り取る鋭い鋏 *al-Miqrāḍ al-Hād li Qaṭ' Lisān Muntaqis Dīn al-Islām bi al-Bāṭil wa al-Ilhād*』執筆

53) 1月から2月の間に書かれたというような場合は 02-01/1859 のように表記した。

- 1852年 ナポレオン3世によって解放、アナトリアのブルサへと移住 (1853-55)
- 1855年 9月、フランス訪問の際、『知性ある人への喚起、無関心な人への忠告 *Dhikrā al-‘Āqil wa Tanbīh al-Ghāfil/ Rappel à l’intelligent, avis à l’indifférent*』をアジア協会 (La Société Asiatique)<sup>54)</sup> に提出、ダマスカスへと移住
- 1860年 ダマスカスでの宗派対立による暴動において、キリスト教徒救済
- 1862年 ハッジを行う (-64)
- 1865年 フランスを訪問、キリスト教徒救済の功績によりレジオン・ドヌール勲章授与
- 1867年 万国博覧会見学
- 1869年 スエズ運河開通式出席
- 1883年 没、イブン・アラビー廟内に埋葬

### 参考文献

< 一次資料 >

アラビア語

al-Jazā’irī, al-Amīr ‘Abd al-Qādir. 1966. *Kitāb al-Mawāqif fī al-Taṣawwuf wa al-Wa’z wa al-Irshād*. al-Ṭab’a 1. Dimashq: Dār al-Yaqza al-‘Arabīya li al-Ta’līf wa al-Tarjama wa al-Nashr.

———. 1972?. *al-Miqrād al-Hādd li Qaṭ’ Lisān Muntaqish Dīn al-Islām bi al-Bāṭil wa al-Ilhād*. Bayrūt: Dār Maktaba al-Ḥayāt.

———. 2004. *Mudhakkirāt al-Amīr ‘Abd al-Qādir: Sīra Dhātīya Kataba-hā fī al-Sijn sana 1849*. Muḥammad al-Ṣaghīr Bannānī, Maḥfūz Samātī, Muḥammad al-Ṣālīḥ Aljūn (eds.). al-Ṭab’a 4. al-Jazā’ir: Sharika Dār al-Umma.

al-Jazā’irī, Muḥammad b. ‘Abd al-Qādir. 1964. *Tuḥfa al-Zā’ir fī Ta’rīkh al-Jazā’ir wa al-Amīr ‘Abd al-Qādir*. Mamdūh Ḥaqqī (ed.) Ṭab’a 2. Bayrūt: Dār al-Yaqza al-‘Arabīya li al-Ta’līf wa al-Tarjama wa al-Nashr.

英・仏語

*Le Moniteur Universel*. no.328, 23 novembre. 1852.

*Copie des lettres écrites par Abd el Kader (registres de la main de l’interprète Georges Bullad), Amboise et Brousse 1851–1853, Damas 1855–1879 antérieures à 1801 série LXI*. article no.20–21. Fonds de Barbarin. Archives de la Chambre de Commerce de Marseille.

al-Jazā’irī, al-Amīr ‘Abd al-Qādir. 1980. *Le livre d’Abdelkader: rappel à l’intelligent, avis à l’indifférent (Dhikra al-‘aqil wa Tanbih al-Ghafil)*. Gustave Dugat (tr.). Tunis: Bouslama.

*Les travaux inédits les piéces de correspondance de l’Emir Abd el Kader léguées par Monsieur Le Curé Rabion*. H:IV (104). Archives Communaux d’Amboise.

< 二次資料 >

英・仏語

Ageron, Charles-Robert. 1970. “Abd el-Kader souverain d’un royaume arabe d’Orient,” *Revue de l’Occident musulman et de la Méditerranée*. vol.8. no.1. pp.15–30.

54) 1829年王令によって創設された東洋学研究組織。シルベストル・ドゥ・サスイが初代総裁、会員にはロゼッタストーンを解読したシャンポリオンなど。

- Azan, Paul. 1925. *L'Emir Abd el-Kader 1808–1883: du fanatisme musulman au patriotisme français*. Paris: Hachette.
- Bellemare, Alexandre. 1863. *Abd al-Kader: sa vie politique et militaire*. Paris: Hachette.
- Bourgade, L'abbé. 1847. *Soirées de Carthage ou dialogues entre un prêtre catholique, un muphti et un cadi*. Paris: Typographie de Firmin Didot Frères.
- Bouyerdene, Ahmed. 2008. *Abd El-Kader: L'harmonie des contraires*. Paris: Editions du Seuil.
- . 2010. “Origine et originalité de la controverse religieuse initiée par Abd El-Kader al-Hassani avec les Chrétiens.” *Abd El-Kader, un spirituel dans la modernité: sous la direction d'Eric Geoffroy*. Paris: Dar Albouraq. pp. 21–31.
- . 2011. “L'émir Abd el-Kader à Pau: Exemple d'un dialogue religieux au XIX<sup>e</sup> siècle.” *Studia Islamica*. nouvelle édition. 2. pp. 125–154.
- Civry, Eugène de. 1853. *Napoléon III et Abd-El-Kader; Charlemagne et Witikind: étude historique et politique: contenant un grand nombre de lettres et de documents inédits*. Paris: P. Martinon, Libraire-Éditeur.
- Daumas, Eugène. 1851. *Les chevaux du Sahara*. Paris: Chamerot.
- Danziger, Raphael. 1977. *Abd al-Qadir and the Algerians: Resistance to the French and Internal Consolidation*, New York: Holmes & Meier Publishers.
- Delorme, Christian. 2008. *L'émir Abd-el-Kader à Lyon: 12–13 décembre 1852*. Lyon: M. Chomarot.
- Dupuch, Antoine-Adolphe. 1849. *Abd-El-Kader au château d'Amboise*. Bordeaux: Faye.
- . 1860. *Abdel Qader, sa vie, sa lutte avec la France, son souvenir*. Bordeaux, Paris: Bourgeois de Soye.
- Falloux, Alfred de. 1848. “Une entrevue avec Abd-El-Kader,” *L'Ami de la religion*. tome 139. no. 4692. Paris: Imprimerie d'Adrien le Clerc et Cie. pp. 381–389.
- Gabeau, Alfred. 1898. “L'émir Abd-el-Kader à Amboise,” *Bulletin de la société archéologique de Touraine*. tome 11. pp. 348–383.
- al-Jazā'irī, al-Amīr 'Abd al-Qādir. 1995. *L'émir Abdelkader: autobiographie écrite en prison (France) en 1849 et publiée pour la première fois*. H. Benmansour (tr.). Paris: Dialogues édition.
- Khelfa, Benaïssa. 1997. “La Bible lue par un musulman du XIX<sup>e</sup> siècle.” *Les cahiers de l'institut des hautes études islamiques*. no. 3–4. pp. 55–75.
- Lagarde, Michel. 2000. “Un exemple de la position akbarienne sur le Jihād.” *La liberazione dei 'cattivi' tra cristianità e islam, oltre la crociata e il ġihād: tolleranza e servizio umanitario, atti del congresso interdisciplinare di studi storici (Roma, 16–19 settembre 1998) organizzato per l'VIII centenario dell'approvazione della regola dei Trinitari de parte del Papa Innocenzo III il 17 dicembre 1198/15 scfar, 595H*, a cura di Giulio Cipollone. Città del Vaticano: Archivio Segreto Vaticano. pp. 629–633.
- Lanifry, Jacques. 1985. “Islamic-Christian Dialogue: Approaches to the Obstacles.” *Christianity and Islam: The Struggling Dialogue*. Richard W. Rousseau, S.J.(ed.). Chicago: Ridge Row Press. pp. 15–27.
- Lataillade, Louis. 1984. *Abd el-Kader, adversaire et ami de la France*. Paris: Pygmalion, G. Watelet.
- Lesseps, Ferdinand de. 1887. *Souvenirs de quarante ans dédiés à mes enfants*. Paris: Nouvelle Revue.
- Marshall, David. 2001. “Christianity in the Qur'ān,” Lloyd Ridgeon (ed.). *Islamic Interpretations of Christianity*. Richmond, Surrey: Curzon Press. pp. 3–29.
- Monin, Frédéric. 1868. “Abd-el-Kader littérateur et philosophe,” *Mémoires de la Société littéraire de Lyon*. Lyon: imprimerie. de Aimé Vingtrinier. pp. 135–146.

- Mornand, Félix. 1856. *La vie arabe*. Paris: Michel Lévy Frères.
- Poujoulat, Baptistin. 1986. *La verite sur la Syrie*. tome2. Beyrouth: Dar Lahad Khater.
- Roches, Léon. 1884. *Trente-deux ans à travers l'Islam (1832–1864)*. Paris: Firman-Didot.
- Schilcher, Linda Schatkowski. 1985. *Families in Politics: Damascene Factions and Estates of the 18th and 19<sup>th</sup> Centuries*. Stuttgart: Steiner-Verlag-Wiesbaden.
- Semidei, Manuela. 1966. “De l’Empire à la décolonisation à travers les manuels scolaires français,” *Revue française de science politique*. 16<sup>e</sup> année. no. 1. pp.56–86.
- Suchet, Abbé (Vicaire général d’Alger). 1840. *Lettres édifiantes et curieuses sur l’Algérie*. Tours: Ad Mame et Cie.
- Sureau, Jean-Louis et Alexis Feuvarc’h. [n.d.]. *L’Emir Abd el-Kader à Amboise 1848–1852*. [n.p.]: Fondation Saint-Louis, Château Royal d’Amboise.
- Tartar, Pasteur Georges. 1985. *Dialogue islamo-chrétien: sous le calife Al-Ma’mûn (813–834), les épîtres d’Al-Hashimi et d’Al-Kindi*. Paris: Nouvelles Editions Latines.
- Teissier, Henri. 1975. “L’entourage de l’émir ‘Abd el-Qâdir et le dialogue islamo-chrétien,” *Islamochristiana*. no. 1. pp.41–70.
- . 1998. “Le sens du dialogue inter-religieux,” La Fondation Emir Abdelkader (ed.). *Itinéraires*. no. 2. janvier/juin. pp.20–22.
- Temimi, Abdeljelil. 1978a. “Lettres inédites de l’émir ‘Abdelkâder,” *Revue d’Histoire Maghrébine/ al-Majalla al-Tārīkhīya al-Maghāribīya*. vol. 10–11. pp. 159–202.
- . 1978b. “Lettres inédites de l’émir ‘Abdelkâder,” *Revue d’Histoire Maghrébine/ al-Majalla al-Tārīkhīya al-Maghāribīya*. vol. 12. pp. 308–343.
- . 2008. “L’Emir Abdelkader face à la problématique du rapprochement avec les civilisations, les religions et les peuples,” *Revue d’Histoire Maghrébine/ al-Majalla al-Tārīkhīya al-Maghāribīya*. vol. 35 (132), pp.33–45.
- Watt, W. Montgomery. 1967. “The Christianity Criticized in the Qur’ân,” *The Muslim World*. 67 (2). pp. 197–201.
- Winter, Michael. 1988. “A Polemical Treatise by ‘Abd al-Ġānī al-Nābulusī against a Turkish Scholar on the Religious Status of the *Ḍimmīs*,” *Arabica*. tome 35. pp. 92–103.

インターネット資料

- “Conférence du 7 décembre 2004 à Lyon de Mgr Teissier et de M. Boutaleb,” pp. 1–15.  
<http://www.ldh-toulon.net/spip.php?article430> (2012/07/31 閲覧).